

Moore's Social Origins of Dictatorship and Democracy. *Politics and Society* 4(1): 1-34.

池田真也, 『商人が絆す市場——インドネシアの流通革命に交わる伝統的な農産物流通』 京都大学学術出版会, 2022, iii+207p.

概要

本書は、インドネシア・ジャワの野菜の伝統的流通が、農産物流通が近代化するなかでどのように変化したのか、その実態を明らかにするものである。伝統的流通とは「場としての市場（いちば [評者注：『パサールと呼ばれる公設市場』（p. 17)）と多数の商人による取引で成立」（p. 10）する市場システムを、農産物流通の近代化とはスーパーマーケットなどの大規模小売業者の台頭と、政策的に推進されつつある、公設の中央卸売市場を中心とした流通の展開を指す。

評者なりに解釈すると、この変化から次の仮説が導かれる。第1に、品質に応じて選別された大ロットの農産物の迅速かつ安定的な調達という取引要件を満たすために、スーパーマーケットや中間業者が生産者と契約栽培や販売契約などを含めた垂直統合を進め、伝統的な中間流通が中抜きされる。第2に、公設卸売市場が価格形成や集分荷などの機能を持ち、流通が効率化されることで伝統的流通を置き換える。本書は上記の課題と仮説に対して、定性的なインタビューによる事例研究を積み上げる地域研究と、定量データを収集し計量経済学的に仮説検証する開発経済学的手法を駆使して接近するものである。

結論は、伝統的流通は近代的流通に取って代わられることなく、むしろ卸売市場流通として相当程度機能しているというものであり、「伝統的流通はあるがままに市場として発展し……近代的な卸売市場流通に向けて展開し……流通革命という大きな市場構造への衝撃の中でも、それを産地の商人が取り込む形で発展し……商人により自律的に支えられた市場システムである伝統的流通こそがジャワの野菜流通の根幹」（p. 177）とまとめられている。評者なりに言い換えれば、伝統的流通が

進化・発展し、近代的流通を逆に包摂しつつあるといえるだろうか。

この結論は以下の各章の知見が根拠となっている。第1～3章は産地流通を対象とする。第1章では、(1) 実態として契約栽培などの垂直統合はむしろ後退し、スーパーマーケットなどを起点とした流通再編は進んでいない、(2) 小売業者・商人、商人間の関係性も希薄化している、(3) 商人・農家間では（農家ではなく）商人が収穫・輸送を行う収穫・輸送請負契約（トゥバサン）がみられることを報告している。第2章では、そのトゥバサンの取引特性が、なぜスポット現金払い取引ではないのかという契約選択の観点から検討される。動機としては、トゥバサンが垂直統合に代わって近代的流通の取引要件を満たせるのかという関心があるのだろう。回答は、トゥバサンの下では契約前に商人が事前に農産物を評価しており、「商品の属性・量などの真の価値を測定するために契約交渉時に必要な『販売前の評価費用』（p. 68）が低いために選択されるというものである。結論として、トゥバサンは「契約栽培や出荷組合の前段階として解釈でき、近代化に向けた伝統的流通の適応過程と捉えることができる」（p. 87）とまとめられている。第3章は、2000年代に近代的流通を担っていたSS（specialized supplier: 「スーパーマーケットへの販売に特化した産地業者」（p. 94））がその後どうなったのかをフォローアップし、(1) SSの多くは退出し、生産者との契約栽培も打ち止めになった、(2) 契約栽培が継続しなかった理由は、生産者にとっての代替機会である伝統的流通の市場価格の向上と、スーパーマーケット間の競争激化に伴う契約栽培の買取価格の低下により関係的契約の維持が困難になったため、(3) 現在の流通経路は、（小規模）農家→中間業者（組合・農民グループ・農業企業、大規模農家など）→SS→スーパーマーケットに至ることを明らかにする。そのうえで、産地流通の展開として(1) SSを排したスーパーマーケット・中間業者間の取引は、必要資金や技術の制約から困難だが、(2) 中間業者を排したSS・（小規模）農家間の直接取引は、トゥバサンを介せば可能性はあり得るが、農家への教育的投資が必要との展望が示される。

第4, 5章は卸売市場流通を対象とする。第4章は、「2000年代以降の産地と消費地を結ぶジャワの野菜流通における市場統合を検討」(p. 118)する。時系列データ分析によって消費地・産地間の卸売市場価格の連動から市場統合度を計測し、卸売市場流通には改善の余地があること、流通が非効率な理由として「物流インフラの整備不足や介在する商人の多さによる卸売市場間の価格差」(p. 136)が述べられる。第5章は中央卸売市場で行われている取引の実態解明を通して、卸売市場としての価格形成、集分荷、代金決済・信用供与機能の実現の程度が検討される。ジャワ西部ではスポット契約中心のオープンな市場で、卸売業者(バンダル)と仲買人(チュンテン)も分化し競争的な取引がなされているが、ジャワ東部ではそうではない、卸売市場でのマークアップ率は産地より高く市場統合の阻害要因と考えられる、卸売業者の初期投資は大きく参入障壁は高い、といったことが報告される。最後に中央卸売市場流通の展望として、パサールは中央卸売市場になったのか、中央卸売市場の意義は何かが論じられる。

コメント

本書の魅力は、農産物流通の近代化に対して、伝統的流通がどう対峙・変容したかを叙述、考察している点にあり、比較・歴史制度分析として興味深く読んだ。流通や商慣習は地域の独自性が表れやすく、特定のモデルが当てはまりにくい。代表的な「モデル」として、例えば公設の中央卸売市場・商品取引所(commodity exchange)を整備し、流通を近代化させることが考えられるが、アフリカなどではその成否に議論がある。本書では、伝統的流通が近代的流通に取って代わられるのではなく、発展的に包摂しつつあるというメッセージが打ち出され、インドネシア・ジャワの伝統的な地場の制度の自律性、柔軟性、対応力を示すものといえよう。地域固有の制度のあり様と発展過程を明らかにしており、地域研究ならではの成果である。

いまひとつの本書の貢献は、この大テーマに関連した個別論点の地に足のついた詳細な検討だろう。具体的にはスーパーマーケットの購買行動(第

1章)、トゥバサンの実態(第2章)、SS衰退後の変化と中間組織の取引形態(第3章)、中央卸売市場内での取引(第5章)など、定量分析を超えた個別事例の詳細な記述から、何が起きていて論点になるかが垣間みえる。評者は特に、近代的流通の取引要件を満たすため、小売やSSと生産者間の垂直統合ではなく、トゥバサンを通して品質評価・選別機能を発展させつつ、柔軟に必要な量を調達する経路が形成されつつあるとの観察を興味深く感じた。

以上の貢献を踏まえたうえで、2点コメントを付したい。第1に、全体としてのメッセージはクリアだが、各章がそれをどうサポートしているのか、有機的に理解することが難しかった。各章の課題(小テーマ)を本書全体の大テーマと十分関連づけ、それを検証すべく構成されていればと思う。特に卸売市場流通を対象とした第4, 5章は次のような疑問が残り、位置づけに迷う。伝統的流通と近代的流通とは何か? パサールが伝統的流通、公設された中央卸売市場が近代的流通なのか? 両者は完全に分化しているのか、それとも(どう)関連しているのか? 卸売市場価格ベースの市場統合分析は、近代的流通と伝統的流通のどちらの効率性を検討しているのか? 卸売市場なので近代的流通と解釈したが、それだと伝統的流通とは関係ないので、卸売市場流通の展開という「近代化」が伝統的流通にどう影響するかという論点とどう接合するのか?

第2に、トゥバサンの契約選択(第2章)について、本書のフレームワークが妥当か疑問に感じた。評者の理解では、本章の想定は、品質にばらつきがあり真の評価額が不確実な野菜を適正価格で買い付けるため、商人は収穫前に野菜の品質を事前評価し、その評価費用が低ければ(農家ではなく商人が収穫・輸送を行う)トゥバサンが選択されるというものである。しかし、トゥバサンと対置される現金払い契約でも、農家が収穫する前に事前評価できるだろうし、収穫後でも検品できる。そうであれば、品質評価では説明がつかないので、商人の方が収穫・輸送作業の効率性が高いという従来の説明が妥当となる。したがって、現金払い契約では品質評価が難しい理由(収穫前に事

前評価のために商人を呼ばねばならず煩雑であり、収穫しながらの方が品質評価が容易、など)や、価格が収穫前と後のどちらで合意されているか(事前評価ができず、かつ収穫前に価格をコミットするなら、商人は品質の不確実性のリスクを負う)、品質や規格に合わせた価格づけがあるか(収穫後に品質ごとの価格×重量で清算すればよい)、など現実に即した事実で本章の想定を裏づけてあるとよかった。また、問題の本質は野菜の品質の不確実性なので、品質とは無関係な一般的な市場価格の時系列分散を評価費用の指標とするのは不適切であり、本書が依拠している Leffler and Rucker [1991] のように、品質のばらつきを表す指標を使うのが望ましい。

以上、2点コメントを加えたが、全体としては捉えるのが難しい発展途上経済の農産物流通の実態を描き出した良書である。農業・開発経済、農産物流通、卸売市場制度、商人活動や関係的契約などに関心がある読者に一読を薦めたい。なお、本書に関わる論点の最近の開発経済学分野の文献として、以下も有益だろう。契約栽培や抜け売りは Blouin and Macchiavello [2019]、農産物の品質プレミアムと品質改善は Bold *et al.* [2022]、商人間の競争度は Bergquist and Dinerstein [2020]、Casaburi and Reed [2022]、アフリカの中央卸売市場は Sitko and Jayne [2012]、中央卸売市場の効率性と厚生 of 理論分析については Nyarko and Pellegrina [2022] などがある。

(有本 寛・一橋大学経済研究所)

参考文献

- Bergquist, Lauren Falcao; and Dinerstein, Michael. 2020. Competition and Entry in Agricultural Markets: Experimental Evidence from Kenya. *American Economic Review* 110(12): 3705–3747.
- Blouin, Arthur; and Macchiavello, Rocco. 2019. Strategic Default in the International Coffee Market. *Quarterly Journal of Economics* 134(2): 895–951.
- Bold, Tessa; Ghisolfi, Selene; Nsonzi, Frances; and Svensson, Jakob. 2022. Market Access and Quality Upgrading: Evidence from Four Field Experiments.

American Economic Review 112(8): 2518–2552.

- Casaburi, Lorenzo; and Reed, Tristan. 2022. Using Individual-Level Randomized Treatment to Learn about Market Structure. *American Economic Journal: Applied Economics* 14(4): 58–90.
- Leffler, Keith B.; and Rucker, Randal R. 1991. Transactions Costs and the Efficient Organization of Production: A Study of Timber-Harvesting Contracts. *Journal of Political Economy* 99(5): 1060–1087.
- Nyarko, Yaw; and Pellegrina, Heitor S. 2022. From Bilateral Trade to Centralized Markets: A Search Model for Commodity Exchanges in Africa. *Journal of Development Economics* 157(June): 102867.
- Sitko, Nicholas J.; and Jayne, T. S. 2012. Why Are African Commodity Exchanges Languishing? A Case Study of the Zambian Agricultural Commodity Exchange. *Food Policy* 37(3): 275–282.

南田みどり. 『ビルマ文学の風景——軍事政権下をゆく』本の泉社, 2021, 337+vip.

独特な構成の書物だ。第一章こそ、近代の散文小説誕生から、1990年ごろまでのビルマ文学史を丁寧に整理する。だが第二章から第五章までは、そののちにミャンマーを訪れた著者が目にした文学風景を、さながら紀行書のようにつづっている。

ここに通底する視線は「まえがき」と「あとがき」に書かれているとおりだ。「わたしはひとりの生活者にすぎない」(p.3)。そして「ビルマという他者を語るわたしは、実は自己を語っているにすぎない」(p.335)。現代の日本ではおそらく唯一であろう、ビルマ文学の専門家である著者が、ビルマ文学とミャンマーを通じて振り返る半生の記録として、興味深く読んだ。

もちろん、本書において著者の日常生活が直接的に語られるわけではない。だが、ひとりの小さな人間の小さな声をすくい上げる営みを文学と呼ぶのであれば、ここに響くのは現地の作家たちや市井の人々の声だけではない。日本人としてビルマ